＜教育実践研究＞

ワークショップデザイナー育成プログラム実施報告

――事業の成果と今後の展開――

五島朋子

Workshop Designer Training Program at Tottori University

――Its results and perspectives――

GOTO Tomoko

キーワード：ワークショップデザイナー，学び直し，地域教育
Keywords：Workshop Designer, Recurrent Education, Community Education

はじめに

2010年9月から2011年1月にかけて，社会人を対象とする「ワークショップデザイナー育成プログラム」を鳥取大学にて開講した。本稿では，その実施内容を振り返り，成果と課題，今後の展開について報告する。

ワークショップデザイナー（以下ＷＳＤ）育成プログラムは，青山学院大学と大阪大学が共同して立案したもので，文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」委託事業として採択され，2008年より2大学で実施されている。事業最終年度となる2010年度には，東京，大阪以外の地方大学での実施が予定されていた。縁あって，鳥取大学が事業の「協力実践校」という位置づけで，1期分定員20名の講座を開講することとなった。

英語のワークショップ（workshop）は，「仕事場，小規模の工場」「研修会」を意味する（三省堂「新グローバル英和辞典」）が，本事業では「参加体験型活動プログラム」すなわち「コミュニケーションを基盤とした知識や技能を活用する活動プログラム」[1]と定義されており，とくに子どもを対象にした活動プログラムを企画運営できる専門人材の育成が意図されている。ここでいうワークショップは，より具体的には，教師や講師が一方的に知識や技術を伝達する講義のような形式の学習スタイルではなく，参加者が主体的に参加・体験し，一人ではなく共同作業を通じて，何かを学び合ったり，創作したりする学習や創造のスタイルを指している。[2]

筆者自身は，1980年代終わりから2000年代にかけて，自治体職員から社会人大学院生へと立場を変えながら，様々な自治体やNPO等といっしょに，自治体が市民参加で進める計画づくりのための「ワークショップ（以下ＷＳ）」の企画運営に多数携わった。特権的な専門家である都市計画家や建築家，行政職員が，一方的に地域の様々な計画づくりを進めるのではなく，そこに住み暮らす生活者の実感やつぶやきを拾い上げ，まちづくりに反映させて行こうという契機が，それまでの都市計画への反省から生まれていたように記憶する。1992年の都市計画法の改正により，市町村レベルの都市計画マスタープランの策定が，市民の意見を取り入れながらすすめられるよう位置づけられたこともあり，自治体まちづくりの分野を中心に，市民参加の有効な方法として，ＷＳ方式が全国に広まって行った。現在では，まちづくりの具体的な課

題解決へ向けて，参加者間の合意形成をはかることを目的とするだけでなく，芸術表現の分野でも新しい創造活動のあり方として，あるいは自然環境をよりよく学び体験する方法として，また精神的な癒しを共有する等，様々な分野でＷＳが行われるようになっている。（図１）

グローバル化の急速な進展，少子高齢化や高度情報通信化といった社会構造の転換，価値観の多様化により，現代社会は激しく変化しまた複雑になってきている。本事業では，そのような社会状況の中で，地域コミュニティ，学校，民間企業，医療福祉などありとあらゆる組織において，異文化理解をすすめながら意見をすりあわせていくコミュニケーションの場づくりの専門家，すなわちＷＳＤが求められているという認識に立って構想されている。

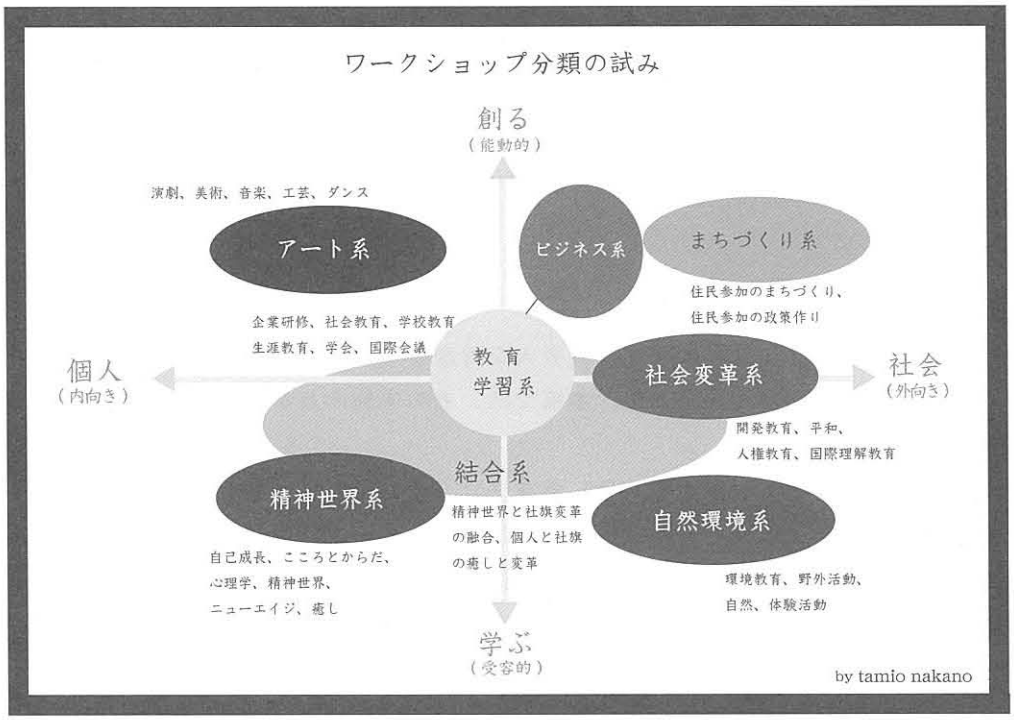

図１　ワークショップ分類の試み（中野民夫 e-ラーニング配布資料より）

１．ＷＳＤ育成プログラム実施概要

まず，ＷＳＤ育成プログラムの枠組みについて確認しておく。「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」は，2006 年 7 月 7 日に閣議決定された「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2006」[3]における「再チャレンジ支援策」を受け，「学びの複線化」に対応する文部科学省事業のひとつとして実施された。公募要領には，以下の５点すべての内容を含む事業を対象とすると記載されている。[4]

①社会人(現に職業を有する者に加え，子育て等により就業を中断した女性，ニート，フリーター等も含む)を対象とした教育プログラムであること

②「関係団体(経済団体，職能団体や地方公共団体の労働関係部局など)との連携」等により，社会のニーズを十分に踏まえ，再チャレンジ(再就職やキャリアアップ等)に役立つ教育プログラムであること

③単なる公開講座ではなく，学び直しのために体系的に構築され，かつ，短期(1年未満)で 修了できる教育プログラムであること

④大学等における教育・研究資源を生かした教育プログラムであること

⑤一定の能力を身に付けたことについて大学等が証明し，その履修証明の社会的な通用性を高める努力を大学等が行うこと。

ＷＳＤ育成プログラムも，これら５点を押さえて設計されている。履修証明は，2007年の学校教育基本法の改正により，制度上の位置づけがなされ，鳥取大学では2009年に大学規則を改正し「特別の課程の編成」に関する規定が明確化されている。

以上を踏まえたＷＳＤ育成プログラムのカリキュラムは，基礎コース，デザインコース，マネジメントコースで構成され（図２），各大学で行われる対面授業とインターネットで受講できる共通コンテンツのｅ-ラーニングを用い，４ヶ月間で１２０時間を履修する内容となっている。[5]履修後，最終課題を提出し，認められれば，履修証明が発行され，希望者は，キャリアコンサルタントの面接を経て「ジョブカード」を取得できる（資料２）。

ワークショップデザイナー育成プログラム

基礎コース（27時間）

ワークショップをデザインするときの基本的な考えを学習論から学ぶ

・ｅラーニング科目（５科目　15時間）
・演習科目（２科目　12時間）

↓

デザインコース（70時間）

ワークショップをデザインする実践力を磨く

・ｅラーニング科目（６科目 18時間）
・演習科目（４科目 24時間）
・研修科目（２科目 12時間）
・実習科目（２科目 16時間）

↓

マネジメントコース（23時間）

ワークショップをマネジメントしたりコーディネートする際の知識や経験を積む

・ｅラーニング科目（２科目　６時間）
・演習科目（２科目　12時間）
・研修科目（１科目　５時間）

図２　コース・科目名・時間数

e-ラーニングのコンテンツは，青山学院大学と大阪大学が事業初年度に構築し，ＷＳの理論や実践に必要な知識について共通の基盤を提供するものとなっている。e-ラーニングは，青山学院大学ヒューマンイノベーション研究センターが運営するサイトからアクセスして受講し，課題の提出や，対面授業の連絡等も，サイトのSNSを活用するようになっている。

対面授業の「演習科目」は大学での講義を中心にＷＳ体験もしながらＷＳデザインの特性を学ぶ科目，「研修科目」は協力団体等のＷＳを見学し，現場から学ぶ科目，「実習科目」は協力団体のＷＳに参加して，企画・準備・実施・反省等一連の流れを実践的に体験する科目，と位置づけられている。とくに，デザインコースでは，「研修」「演習」「実習」をひとつのユニットとし，ユニットを２回繰り返すことで，ＷＳ実践力を身につけることが目指されている。これら対面授業は，土日に集中的に開講する。

対面授業の具体的な内容は，それぞれの大学の担当教員の専門分野や教育活動の実績をふまえ，青学では教育学の中でも学習環境デザイン，阪大では演劇によるコミュニケーション教育を基盤に組み立てられている。また，２大学に共通する受講生の修了後の活動イメージとして，文部科学省が2010年度から実施している「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」[6]を担う人材育成があった。

鳥大版プログラム実施の具体的な内容はこちらの判断にまかされたが，青学・阪大のプログラム内容と齟齬が生じないよう，青学のＷＳＤ育成プログラム推進コーディネーターと連携を

とりながら進めた。運営体制としては，筆者が代表責任者となり，鳥取大学教育センター教員の大谷直史の協力を得，またＷＳ実践のための協力団体特定非営利活動法人鳥の劇場とも連携した。講座の当日運営には，鳥取在住の大阪大学２期の修了生に協力を仰いだほか，記録のために毎回アルバイトを雇用した。

事業にかかる経費には，青学から鳥取大学に再委託される文部科学省の事業費と，ひとりあたり８万円の受講料収入を充てるよう設計されていたので，事業を実施するには，対面授業の内容を詰めると同時に，ある程度の数の受講生を獲得する必要があった。[7]

２．受講生の募集および受講生の属性

８万円の受講料は，文部科学省申請時に設定されており，変更することはできなかった。2008年度末から開講されていた本プログラムは，2009年度末の時点で青学３期，阪大２期が開講済みで，総定員数100名のところ，応募者数173名，うち116名が受講し，かなりの反響があることは伺えた。８万円は，時間数や内容を考えれば，高い金額設定とはいえないが，県内では専ら無料に近い参加費で様々な研修や講座が開催されており，割高な印象は否めない。筆者が事前に県内関係者に事業予定を話した際にも，ほとんどが「高い！」という反応だった。また４ヶ月間１２０時間の授業は，全部で土日を13日拘束するという内容であり，スケジュール的にも経済的にもかなり高いハードルであると思われた。定員２０名とまでいかなくとも，開講に足る10名程度が果たして鳥取で集められるか，ＷＳＤ育成の意義と価値は理解しながらも，筆者自身不安はあった。

科　目　名	時間数	講　　師　　名
基礎コース		
ワークショップと学び	3	佐伯胖（青山学院大学教授）
ワークショップって何だ？	3	中野民夫（ＷＳ企画プロデューサー）
ワークショップとアート	3	平田オリザ（劇作家・演出家・大阪大学教授）
ワークショップと教育	3	苅宿俊文（青山学院大学教授）
ワークショップと子どもたち	3	吉本光宏（ニッセイ基礎研究） 大月ヒロ子（ﾐｭｰｼﾞｱﾑ･ｴﾃﾞｭｹｰｼｮﾝ･ﾌﾟﾗﾝﾅｰ）
デザインコース		
ワークショップと学校支援	3	堤康彦（NPO法人芸術家と子どもたち代表） 宮絢子（東京家政大学准教授） 馬場雅人（小学校教諭） 平田敬子（杉並区学校教育コーディネーター）
ワークショップと ミュージアム	3	塚田美紀（世田谷美術館学芸員） 下村一（財団法人児童育成協会　子どもの城AV事業部）
ワークショップと地域	3	関口怜子（宮城県立子ども病院癒しの環境ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ） 石戸奈々子（NPO法人CANVAS副理事長） 熊井晃史（NPO法人CANVAS）
ワークショップと企業	3	田村拓（株式会社CSK） 新谷美和（株式会社CSK）
ワークショップをデザインするとは（１）（２）	6	山内健司（俳優　青年団所属） 柏木陽（NPO法人演劇百貨店代表） 吉野さつき（ワークショップコーディネーター） 中尾根美沙子（青山学院大学プロジェクト助教）
マネジメントコース		
実施体制と管理責任	3	吉野さつき
知的財産と助成金	3	堤康彦 井上理恵子（国立情報学研究所 特任助教）

表１　e-ラーニング科目名と講師一覧

東京・大阪には，北海道や九州・沖縄など遠隔地からの受講生もいると聞いていたので，ＷＳＤへの需要は全国的に見れば地方でも存在すると思われたが，鳥取県だけでどれほど需要があるのか検討がつかなかった。とにかくきめ細かに県内で告知して需要を掘り起こすこと，あわせて近隣県にも広報宣伝をしていくこととした。

2009年秋頃から，青学コーディネーターと開講についての打ち合わせを始め，2010年３月にはようやく講座内容の目処がたち，４月の地域学部教務部会に「特別課程の編成」をはかる頃から広報活動を始めた。５月末には，鳥大版の願書受付スケジュールと講師名の入ったチラシ４万枚が刷り上がり，対象と考えられる組織[8]を中心に告知の依頼にまわった。具体的には，山陰両県の自治体及び教育委員会，公立文化施設，医師会，NPO 団体，大学，文化団体などで，兵庫県北部，岡山県の関係機関にも広報を行った。

また，どうしても広報が届きにくくなりがちな県西部での告知を充実させるため，６月 27 日に米子でプレイベント「ワークショップはおもしろい」を開催した。ＷＳＤ育成プログラムのカリキュラムや意義，鳥大版のスケジュールなどを説明し，阪大プログラム講師蓮行氏を招いて，ＷＳ体験ができる機会を設けた。イベントには 16 名の参加（２名は島根県から）があり，そのうち７名が実際に受講生となったので，成果があった。

願書の出足は悪かったが，最終的には当初の懸念を大きく裏切る 28 名の応募があった。書類（小論文「ワークショップデザイナーを目指す理由」と願書）選考を経て，定員を上回る 26 名で開講することとした。

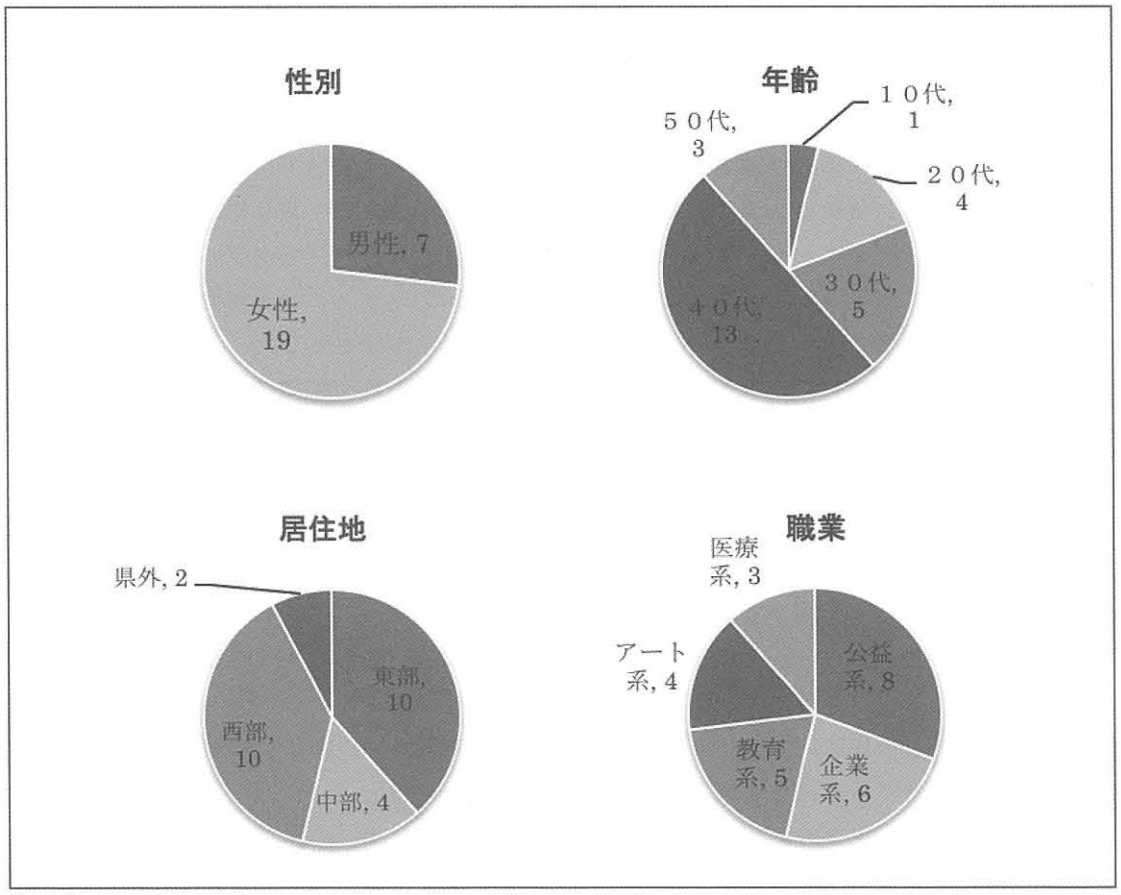

図 3　受講生の属性　（総数 26 名　グラフ中の数字は人数）

分野	具体的な職業
公益系　8名	刑務官　美術館学芸員　ハローワーク職員　ボランティアコーディネーター 文化財団職員（2名）　自然環境施設職員　図書館司書
企業系　6名	民間企業社員（2名）　国際協力コンサルタント　人材コンサルタント まちづくりコンサルタント　フラワーアレンジメント
教育系　5名	専門学校非常勤講師　教育学系大学生　小学校教員　中学校美術教員 高校家庭科教員
アート系　4名	写真専攻大学院生　演奏家　演劇活動（2名）
医療系　3名	看護士(2名)　勤務医

表 2　受講生２６名の職業

受講生の属性（図３）は，性別は女性が 26 人中 19 人と７割を占める。年齢では 40 代が 13 人と最も多く半数を占め，次いで，30 代，20 代，50 代となっている。青学と比べると，やや年齢層が高いが[9]，働き盛りの中堅層が中心である。職業は，特定の分野に偏ること無く，事業で想定した対象をほぼ網羅している（表２）。居住地は，東中西部と県内全域にひろがっており，県外は島根県から２名が受講した。最も遠いのは出雲市である。期待した兵庫県北部，岡山県からの志願者は無かったが，全体としては，県内全域から，また多様なバックグラウンドの人材が集まった。総じて，プログラムの狙い通りの人材が，鳥取でも受講することとなった。

３．鳥大版ＷＳＤ育成プログラムの内容と成果

３－１．概要

鳥取大学の対面授業の内容は，アートマネジメントを専門とする筆者と，環境教育を専門とする大谷で検討した。それぞれの活動背景や専門分野，また実践現場として受け入れが可能な協力団体の特性等から，資料１の内容と講師で行った。基礎コースの演習科目と e-ラーニングで，ＷＳの基本的な考え方や今何故ＷＳかについて教育学や学習環境デザインのアプローチから学んだのち，デザインコースでは，まちづくり，環境教育，アートという多様な領域でのＷＳを幅広く体験し，ＷＳの企画運営を実践する。マネジメントコースでは，収支計画まで含めたＷＳの企画プレゼンを行うことで，ＷＳの企画運営の全体をひととおり学ぶことができるよう計画した。また，デザインコースの前半ユニット１では，ＷＳのプログラム運営を自らファシリテーターとして担う役割を，後半のユニット２では，アーティストや専門家を招きワークショップを企画運営するコーディネーターとしての役割を学ぶ設定とした。

９月５日のオリエンテーションに始まったプログラムは，対面授業が 12 月 19 日に終了，最終課題の提出を１月 14 日に締め切り，履修状況と提出課題を鑑みて，受講生２６名全員に合格通知を出した。２月末頃には，鳥取大学から履修証明書を送付する予定である。

以下，受講生のＷＳ実践の内容を中心に，成果を振り返り課題を検討する。

３－２．デザインコース・ユニット１

ユニット１では，11 月 14 日に子どもの参加者を対象に「まちを歩いて魅力を発見する」ＷＳを企画実践することを考えて，演習科目の講師と内容を設定した。10 月 11 日の演習科目の時点で，受講生を居住地エリアで４グループにわけ，実習までの間に，必要があれば自主的に集まり打ち合わせできるよう配慮した。

また，歩くフィールドを，昭和初期の近代建築「五臓圓ビル」の保存修復を契機に，最近特に住民主体のまちづくり活動が活発に行われている智頭街道商店街エリアとし，商店街振興組合の協力を得て，演習科目で事前にまちづくりや商店街の状況について受講生に情報提供をし

た。実習の開催についても，商店街振興組合，まちづくり会社いちろく，五臓圓薬局等関係の方々に，町内会への告知などのご協力を頂いた。

実習当日は，午前中２グループがＷＳを実践し，残りの２グループは一般参加の親子とともにＷＳに参加した。午後は立場を入れ替え，残りの２グループがそれぞれＷＳを実施し，都合４グループによる４種類のＷＳが行われた。一般参加者は，鳥取大学開放事業として大谷が実施している「遊びのまなび舎～まちをあるいて魅力を発見する」のいっかんとして，おやこ劇場や学童保育の指導者らに呼びかけて集めた。午前午後とも一般参加の子どもは５，６名，大人が２，３名と数は少なかったが，リアルな参加者がいることは受講生にとって実践体験の良い機会となった。

実習当日の４グループの大まかなＷＳ実施内容は以下の通りである。

・グループ１：まちを歩いて発見したものやことを，クイズにして，相手チームと競う
・グループ２：色をテーマにまちを歩いて撮った写真を使って，平面作品をつくる
・グループ３：商店街を歩いて発見したものをかけあわせて，新しい商品を企画提案する
・グループ４：携帯からの指示で，まちのなかの宝物を発見するオリエンテーションゲーム

受講生相互の役割分担，ＷＳに必要な道具類の準備，最初の参加者間の関係づくりから最後の振り返りまで，それぞれに工夫された内容であった。グループ２には美術教員や写真を学ぶ学生がおり，またグループ３の構成員は米子の商業者や自営業が多く，それぞれのグループ構成員の得意分野を活かし，個性が反映されたまち遊びＷＳのプログラムとなっていた。グループ１には，仕事柄子どもと日常的に接している受講生も多く，全般に子どもの参加をうまく促していた。また，街を歩いて発見した事をクイズにするという設定は，街を歩くときの視点を変化させ，クイズづくりは，大人と子どもの混成グループでも子ども独自の視点が生かされるなど，新しい発見と共同作業が活かされていた。できたクイズを集めて，まちあるきのガイドブックにする発展形が他グループから提案されるなど，他を触発する内容でもあった。

３-３．デザインコース・ユニット２

ユニット２は，特定非営利活動法人鳥の劇場が企画主催しているＷＳ事業に相乗りする形で，本プログラムの授業を行った。事業は「劇場でアートを学ぼう！～小学生以上のどなたでもご参加いただける体験型教室」というタイトルで，建築家による２種類のＷＳ「空間実験劇場」，「マイドームをつくろう」，ビデオアーティストによる２日間のＷＳ「みる・撮る・まぜる【えびでお】」が企画され，一般参加者を募集していた。

芸術領域におけるＷＳは，それぞれの芸術分野に固有の表現技術や手法があり，高い専門性が必要とされる。またアーティスト個人の個性に依存するところも大変大きい。受講生には，演劇や音楽の分野でアーティストとしての活動を目指している人も若干いたが，本プログラムは幅広いバックグラウンドの受講生を対象としており，特定の芸術領域にしぼってＷＳを深めるよりは，アーティストを専門家として招いて組み立てるコーディネーター的な立場から学ぶことが有効であると考えた。

鳥の劇場でのＷＳは，竹ひごや木材を使って実際に小さなドームや部屋を組み立てたり，短いビデオ作品を作るもので，そのプロセスには必ず体を動かす場面があり，また誰にでも役割が発生する共同作業が必要であった。形になってできあがった空間や映像は，参加者が鑑賞・共有しやすく，参加者間のコミュニケーションを促す。また，全員で５名のアーティストがそ

れぞれＷＳを主導したが，建築家とビデオ作家という異なるジャンルのアーティストが，どのように参加者たちをユニークな発想へ促し，作品づくりの共同作業へ誘っていくのか，違いと共通性の中から，より良いファシリテーションのあり方を受講生は学んでいたようである。特に，ユニット２実習科目の最後の振り返りの時間は，ＷＳ参加者としての達成感も高かったようで，二人のビデオアーティストに対して，様々な質問と意見交換が途切れることなく続いた。

３－４．マネジメントコース

マネジメントコースの最後の２日間は，受講生自身の関心領域に応じてグループ分けをし，具体的なＷＳプログラムを企画してプレゼンし，売り込むという設定で授業を進めた。提案された企画から，筆者や大谷の活動と連携できそうなものについては，実現の可能性があるということも事前にアナウンスした。結果として，６つのグループから以下のＷＳ企画と具体的なＷＳプログラム案が提案された。

１．美術館に子どもがやってきて楽しめるイベント「らくがきハウス」
２．働く女性のための自然の中でのリラクゼーション・プログラム
３．次世代のための農商工コラボレーション研究会の設立と運営
４．神社を核にした地域コミュニティの再生プロジェクト
５．小学校での演劇を用いたコミュニケーションＷＳ
６．児童クラブでの打楽器ＷＳ「魂が踊る音楽の時間」

あらかじめ講師間で議論して，ＷＳ企画の評価視点を以下の５つに決めておき，プレゼンと質疑応答の後，ゲストや受講生が５つの視点から相互に企画を評価し合った。

・わくわく度（楽しさやおもしろさ，意外性が感じられる企画か）
・オープン度（異文化を受容したり，異なるものを超えて行くような新しいものへ開かれた企画か）
・すっきり度（課題把握と課題解決が的確にマッチした企画内容か）
・きっちり度（適切な費用対効果が得られそうか）
・広がり度（事業後の展開や波及効果が期待できるか）

企画内容は，それぞれのグループの関心テーマに沿った提案ではあったが，新鮮さや意外性はやや乏しく，「おもしろさ」という点ではインパクトが弱かった。企画に対し当事者意識が強い受講生がいる場合は，具体性とある程度の説得力がある企画となってはいたが，残念ながら，グループ内で創発的なアイディアが噴出して構想された，意外性のあるユニークな企画には至らなかったようだ。グループ内でのアイディアの引き出し方や議論のすすめ方について，講師サイドからより丁寧な指導や工夫が必要であったかもしれない。たとえば，ブレインストーミングやKJ法を用いたアイディアの構造化といった具体的なやり方を提示する，あるいは，議論を活性化させるサブ・ファシリテーターを各グループに配置するなどの対応が考えられる。後者については，プログラム運営に携わるスタッフの充実が必要だが，今後このようなプログラムを開講する場合には，改めて考慮する必要があるだろう。

最終日は，それまでの対面授業のゲスト講師や，協力団体などに参加を依頼し，各グループの企画に対しコメントしていただいた。演劇，環境教育，まちづくり，NPO のネットワーキングなど現在具体的なテーマや課題解決に取り組む現場の方々が，企画プレゼンのやり取りに参加したことで，多角的かつ実践的な企画評価が可能となったと考える。

3－4．番外プログラム

多様なバックグラウンドをもつ社会人が受講しているので，修了後も継続されるネットワークの構築が重要だと考え，折をみていくつか交流会を設定した。利便性の高い公共交通が整った東京や大阪と違って，鳥大の場合は自家用車で2，3時間をかけて来る受講生も少なくない。そこで時間的にも経済的にも負担が少なくて済むように，遠方からのゲスト講師の授業の後，そのまま会場で講師も交えた茶話会を，10月2日，10月24日に設けた。また，最終日の前夜には，鳥取大学地域学部附属芸術文化センターで，阪大プログラムの特任講師でもあり劇団主宰者でもある蓮行氏の劇団「衛星」の作品上演を行い，ＷＳＤ受講生有志も観劇，その後の交流会は終了前夜祭とし，交流を深める機会を持った。

受講生の間には，特に11月20日から28日の鳥の劇場での長時間の授業とＷＳの共同作業を経たあたりから，強い連帯感が醸成されていた。鳥の劇場の建物は元幼稚園舎であり、その親密な空間や，休み時間の合間に散策する鹿野町の城下町の雰囲気も，受講生の関係づくりには良い影響を与えたようであった。この頃には受講生側から交流会や，修了後の同窓会，MLの構築等が次々と発案されはじめ，1月現在いずれも実現，もしくは進行中である。

4．ＷＳＤ育成プログラムに対する受講生の評価

12月19日プログラム終了日に，受講生に満足度アンケートを実施した。アンケートの内容は，青学で実施しているものと同じである。欠席者からも後日提出され，総回答数は25となった。（図4）

「プログラムに満足できた」かどうかについては，全員が満足したと答えている。また，「受講前と比べて，ＷＳに対する自分の考え方に変化が起きた」かという質問にも，全受講生が変化したと思うと答えている。この質問への自由記述を見ると，「ＷＳは分野が広く，社会にも働きかけができる手法なのだと分かった」（40代女性），「ＷＳというものを知り，演劇を教育や企業などにも使えることが分かった」（10代男性）「ＷＳの多様な可能性を知った」（30代女性，40代男性）などのコメントから，受講前までのＷＳイメージや捉え方が変化したことが分かる。プログラム全体として満足度も高く，ＷＳについて新しい視点や考えを提供できたと評価できる。

マネジメントコースでは，企画から収支計画までをたてる機会もあり，「今まで見えていなかった予算，ねらい，企画づくりなどについて学べた」（40代女性），「ＷＳに対する意識が漠然としていたので，受講できてよかった」（40代女性）と，基盤となる理論とともに，実践的な内容であったことが評価されているといえる。

プログラム全体に対する感想でも，同様に「ＷＳの実体を良く知らなかった。異なるいくつかの視点を持つことができるようになった」（40代女性），「いろいろな状況，職場でのＷＳの手法が必要とされていることを知った」（30代女性），「今まで知らなかった多様な見方や知識を得られた」（40代女性）「いろいろな分野にふれられたことが良かった」（20代女性）と，多様な分野の多彩な講師によるＷＳを提供できたことは好意的に評価されている。しかし，一方で「（これまで演劇系のＷＳしか知らなかったが）様々な形のＷＳがあることが分かり混乱中でもある」，「とにかく行動することが重要だ」，「生活の中にあるものすべてＷＳと言える」というような捉え方をした受講生もあった。様々なＷＳを実践体験した後に改めて，これら多様なＷＳに共通する本質を提示する時間が，プログラム構成に必要であったかもしれない。

具体的に，「講座を受けて得たこと，成長したことは何か」を尋ねたところ，25 人中 21 人と大多数が「仲間・人脈」と答えている。対面授業では，毎回午前中から夕方まで長時間を共に過ごし，座学ではなく，ＷＳを通じてＷＳを学ぶ形式で共同作業の時間が多く，13 日間で密度の高い交流があり，連帯感が醸成されたといえる。[10]

半数以上の 17 人が，ＷＳの「理論的知識」を得ることができたと答えている。対面授業前半での学習観から考えるＷＳについての専門的な講義や，e-ラーニングの内容，また，ＷＳを体験しながら俯瞰的にＷＳを解説する講義が多く，理論や知識に関して，受講生は手応えを感じ

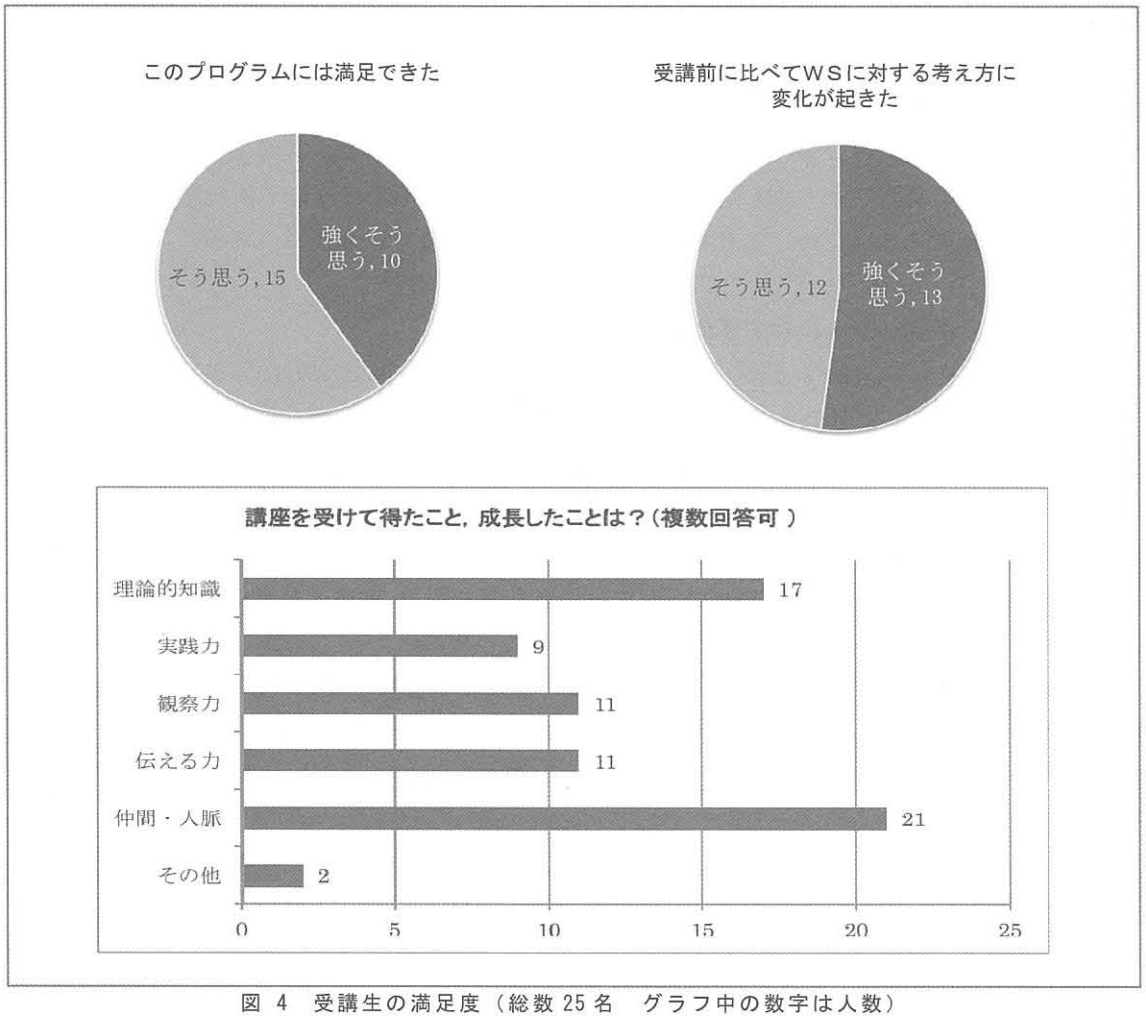

図 4　受講生の満足度（総数 25 名　グラフ中の数字は人数）

たものと思われる。一方，実践現場との連携および現場での体験を繰り返すことで実践力を身につけるというプログラム構成意図にもかかわらず，「ＷＳ実践力」を挙げているのは半数以下の９人である。受講までのＷＳ実践の経験値，プログラム受講動機，修了後のＷＳ実践現場の有無などに起因すると推測される。また，ＷＳは生身の人間相手の活動であり，ＷＳＤの専門性は，参加者間のコミュニケーションやその場で立ち上がるコミュニティへの参加を促すファシリテーションにある。誰かがお膳立てをしたフレームの中でＷＳを運営するシミュレーションを重ねても，確かに真の実践力を身につけるのは難しい。自ら責任を負いながら組み立てたリアルなＷＳ現場を積み重ねることでしか，本当の実践力は身につかない，と本プログラムを

通じて改めて受講生も気がついたと言えそうだ。

その他プログラムの内容について，以下のようなコメントがあった。

・ＷＳの成果（効果）についてのリサーチ，分析がいまひとつ弱い。特に教育現場に何かのアイディアをＷＳとして提案する場合，事例だけでは説得力がない。何かの指標を定めて定量的なデータを得るアプローチも必要ではないか。集団の中で何かを一緒に達成することで高揚感が起こるのは当たり前なので，その先のアプローチが欲しい。（40代女性）

・１日のプログラム内容がかなりタイトだったのでもう少し時間が欲しかった。（30代女性）

・演劇系ＷＳが物足りなかった（40代男性）

・３ヶ月は適当な期間。半年か１年に一度フォローアップがあれば理想です。（40代女性）

・ひとつのＷＳの準備，１日の流れ，クロージングまでを何パターンか修得したかった。（50代男性）

・企業が取り組んでいるＷＳについてもう少し知りたい（20代女性）

社会人への負担を配慮し，４ヶ月間で120時間という，短期集中のコンパクトなカリキュラム設定のなかで実践的に学ぶため，盛り込みきれない内容があるのはやむを得ない。青学では，ＷＳＤ育成プログラムを実践する大学間コンソーシアムの構築，NPO法人ＷＳＤ推進機構の設立などによって，より上位の内容を提供する講座やフォローアップを検討中であり，鳥取大学でもこうした動きと連携を取りながら，修了生のフォローをしていきたい。

５．ＷＳＤ育成プログラム実施の成果と課題

以上，今回のＷＳＤ育成プログラム実施内容を振り返った。鳥大版プログラムについては，特に①組織のミッションの一つとして，恒常的にＷＳを行っている団体がほとんど存在しない，②大学内外にＷＳＤプログラムを推進する運営体制がない，という非常に限定的な環境で実施することになったが，限られた資源と運営スタッフで可能な，最大限かつ有意義なプログラムを提供できたと思う。特に，筆者や大谷，また協力団体「鳥の劇場」それぞれのこれまでの活動実績と人脈が，鳥大版独自のＷＳ教材と現場の設定に活かされたといえる。住民主体によるまちづくり，演劇，環境教育，アート（建築，ビデオアート）などの領域で行われているＷＳの実践の他，異文化理解や企業の研修などで行われているＷＳの目的や方法も部分的に取り入れることができた。現在ＷＳが多様な領域で行われていること，ＷＳ運営者やアーティストの個性によってユニークなやり方で行われていると同時に，そこには参加者間のコミュニケーションを引き出し，参加を促すＷＳＤの専門性が必要とされることなどは，受講生に理解されたものと思う。

以上のことから，今回の鳥取大学におけるＷＳＤ育成プログラム実施に関する成果と課題は，次のようにまとめられる。

【プログラム実施の成果】

- 地方都市にもＷＳＤへのニーズが確実に存在することを顕在化させた
- 現在準備できる資源（人材，環境）を最大限に活用して，具体的な現場と密な連携を取った実践的で充実した内容の講座を，コンパクトな期間で受講生に提供できた
- 多様な関心とキャリアの，高いモチベーションを持つ人材を掘り起こし，ネットワーク化できた
- 社会構造の大きな変化の中で求められているこれからの「ＷＳ観」を示すことができた

【プログラム内容の課題】

- 多様なジャンルで行われるＷＳに共通する本質を改めて提示する必要がある[11]
- グループ内で創発的な議論を生み出すような仕掛けや考え方をより具体的に提示する必要がある
- ＷＳの成果をどのように捉えるのかという「評価」についての考え方，その可能性と限界等を考える機会が必要である

６．鳥大版ＷＳＤ継続にあたっての課題と今後の展望

今回の鳥取大学でのＷＳＤ育成プログラムは，ひとまず１期のみの開講を前提に実施した。今後の継続開講については，まず，受講生数の規模の問題がある。鳥取での実施によって，地方都市でも確実にニーズがあることは確認できた。しかし，鳥大 26 名の受講生は，かなり丁寧に掘り起こした結果の数字で，中には「今回限り」と聞いて受講した人もおり，果たして，毎年 20 名募集を充足するほどの需要があるか，見通しがつかない。2010 年度は青学では，１期 50 人を受け入れ，２クラス同時開講する盛況ぶりだが，なにより東京・大阪と比すれば人口規模に圧倒的な差がある。また，東京・大阪での開講には，全国各地からも応募があったが，地方から大都市へ向かう交通利便性の高さ，都市で学ぶことの付加価値，大学のブランドといった要素が，残念ながら鳥取には欠けている。受講料で運営することを考えると，毎年開講するほどの受講生を県内外から確保するのは困難であろう。[12]

次に運営体制の問題である。今年度のようにＷＳＤ育成プログラムのためだけに組み立てた授業を継続するならば，運営スタッフの拡充は必須である。今回は試行的な要素もあり，授業から，外部講師との調整打ち合わせ，ＷＳ実践のための諸準備，青学との事務手続きや書類作業などほとんど筆者が担った。青学・阪大ともに，文科省事業以外にも学内外の資金を使って，特任講師，研究員，アルバイトなど，プログラム運営に専任で携わるスタッフを雇用し，授業の補助講師から受講生との細かいやりとりまでプログラム推進に必要な役割をになっている。ＷＳについての専門知識や実践経験のある人材が，運営に関わることが望ましい。継続開講には，以上のように人材と体制の整備が必要である。

３番目に，学部もしくは大学院教育との連携や位置づけが必要であると考える。今期は，社会人向けの講座として単独で開講したが，継続開講するには組織体制としても，経費の面でも，教育効果という面でも，大学教育と何らかつながりをもたせるべきであろう。たとえば，阪大は大学院教育にプログラムを組み入れており，大学院生と社会人がともに学ぶ場となっている。青学では次年度以降大学院コースとしての開講が予定され，専門人材の育成として位置づけられている。このような大学教育における位置づけが，継続開講のためには鳥大でも必要である。

以上のように鳥大での継続開講については，筆者一人の判断では難しいところがあるが，当面は，今回開講の大きな成果であった 26 名の修了生との出会いを発展させて行くことに力を注いでいきたい。高いモチベーションと新しい「ＷＳ観」を学んだ修了生たちは，今後，地域コミュニティの再生や活性化，教育や芸術文化活動の現場で，コミュニケーションと参加を促進するキーパーソンとしての活躍が多いに期待される。修了生らと協同して，鳥取でのＷＳ実践の機会を増やしながら，修了生の実践力を磨くとともに，彼らが結節点のひとつとなってさらなるネットワークが広がり，ＷＳの意義や必要性を広めて行くことが重要であると考える。2010 年度中は，プログラム最終日に企画提案された子どもを対象とするＷＳ「らくがきハウス」を，

「遊びのまなび舎」のいっかんとして実施することが決まっている。当該グループのメンバーの他受講生有志が集まり，３月５日の鳥取大学での開催に向けて準備が進められている。これから派生して，倉吉市，日南町でも「らくがきハウス」ＷＳを実施するよう修了生たちで進めている。

また次年度以降は，ＷＳの評価や企業におけるＷＳ導入の事例についての講座等，受講生からの要望も取り入れながら，地域貢献事業のいっかんとしてフォローアップ講座を開催することを検討している。ＷＳが可能にする新しいコミュニケーションのあり方や、地域社会のあり方を探りながら、まずは、修了生たちがＷＳ実践を行える場や機会を創出していくことが、筆者の当面の役割と考えている。

今後，青学では，ＷＳＤに関するe-ラーニングのコンテンツを拡充させていく予定と聞いている。一人当たりの使用料を負担すれば，引き続き鳥大からの利用も可能である。大都市の大規模教育機関の特色あるコンテンツを利用しながら，地域に固有の資源や課題意識を取り込んでＷＳＤ育成プログラムのような講座を用意して行くことは，鳥取大学のような地域の大学のこれからの役割としてきわめて重要なことだと思う。今回多くの受講生が，自治体や財団が開講する無料講座ではなく，「大学での開講だからこそ，しっかり学べると思って希望した」という受講理由を語っている。大学に蓄積されている知識と理論，専門性に対して，非常に大きな信頼と期待があることが伝わってきた。少子高齢過疎化の中で，とりわけ，大学の地域社会における役割や意義はますます大きくなってきている。今回のＷＳＤ育成プログラムの講座を通じて、地域の専門教育に対するニーズを的確にとらえ，大学の知を魅力ある教育プログラムとして地域社会に還元していくことの意義と手応えを感じている。

五島朋子（鳥取大学地域学部附属芸術文化センター）

---

[1] ワークショップデザイナー育成プログラム公式ホームページより
http://www.hirc.aoyama.ac.jp/ＷＳＤ/outline/index.html

[2] 中野民夫『ワークショップ』岩波書店　2001年

[3] http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizai/kakugi/060707honebuto.pdf#search='骨太の方針 2006' 26～27ページ

[4] 文部科学省ホームページ　http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/04/07041202/001.pdf
「社会人の学び直しニーズプログラム対応推進事業」は，平成21年の事業仕分けで，廃止が決まった。

[5] １２０時間が，履修証明制度に必要な最低時間数である。

[6] 「児童生徒に対し芸術家による表現手法を用いた計画的・継続的なワークショップ等の実技指導を実施することにより，芸術を愛する心を育て，豊かな情操を養うとともに，コミュニケーション能力の育成を図ることを目指し」た事業である。文部科学省ホームページより。

[7] 再委託費が50万円弱，受講料２６名分２０８万円で運営した。なお文科省予算は，全体運営にかかる経費，受講料は受講生に還元される経費として，使用区分が定められている。

[8] ワークショップデザイナー育成プログラム公式ホームページには，対象者として「地域教育や学校支援にボランティアで関わっている方，芸術家，教育やアートに関連している行政・企業・公益法人・NPOなどの関係団体職員，企業のCSRを担当している社員，対人サービスを担当している方など」が想定されている。

[9] 2010年度の青学受講生127人のうち，30代が最も多く40%，ついで40代29%，20代20%，50代10%となっている。男女比はあまり変わらない。

[10] 青学のアンケートでも，「仲間・人脈」と答えた人が最もおおく，次いで「理論的知識」「観察力」「伝える力」「実践力」と続き，鳥大もほぼ同じ結果が出ている。

[11] １月２４日に大阪大学で行われた３校の実行委員会成果報告会でも，いっかんした資料が必要という意見もでていた。また，e-ラーニングの充実で，それを担保するという方向性も示された）

[12] 文部科学省の委託費が2010年度限りなので，青学・阪大では，受講料を１２万円ほどに値上げしてプログラムを継続か移行する予定である。